縄文時代早期の磨製石鏃について

宮　田　栄　二

Polished Arrowheads in Jomon Earliest Period

Miyata　Eiji

要旨

縄文時代早期，全面を研磨した磨製石鏃は，近年その資料数が増加している。最近調査された出土例を概観した結果，磨製石鏃の形態は５類に分類できた。そして共伴土器から時期的な位置づけと形態の変遷を検討した。さらに磨製石鏃の製作技術と機能にも触れる。そして出土分布と石材環境の面から磨製石鏃が製作・使用された背景を明らかにした。

キーワード：縄文時代早期，磨製石鏃，石器石材，製作技術

1　はじめに

縄文時代草創期から早期における南九州地域は，日本列島における他の地域ではみられない独特な遺構・遺物が多い。

草創期における船形配石炉あるいは早期における竪穴の外部に柱穴がめぐる住居跡などの遺構や，遺物では幅広の隆帯で厚みのある隆帯文土器，また早期の壺形土器や角筒土器，そして石器では榎ノ原型石斧と呼ばれる円筒状の丸ノミ形石斧などが南九州の特殊な遺構・遺物として知られている。

今回取り上げる磨製石鏃も最近になって出土例が増加しているものであり，他の地域ではほとんど例のない南九州的な遺物である。

これは西北九州などの地域で縄文時代早期遺跡に多い局部磨製石鏃とは全く異なり，全面を丁寧に研磨した石鏃である。局部磨製石鏃は出現時期が縄文時代草創期から早期前半と南九州のものとほぼ同じであるが，黒曜石を使用し，通常の打製石鏃を製作した後，中央部を薄くするため研磨が施されたものであり，南九州の磨製石鏃とは石材選択の点や製作技術など全く異なっている[1]。

かつて筆者は南九州縄文早期の磨製石鏃を集成（宮田 1994）しているが，当時６遺跡７点でしかなく，極めて特殊的な存在と考えていた。しかし，その後出土例が少しずつ増加し（大久保 1996），現在では南九州縄文時代早期を示す代表的な石器の一つという位置を占めるほどになっている。

2　主要出土遺跡の概要

前回集成した時点では，塚ノ越遺跡，西丸尾遺跡，榎崎Ｂ遺跡など，そのほとんどが１遺跡１点のみの単独出土に近い状況であった。時期としての共伴する土器型式は早期前半の前平式土器及び後半の塞ノ神式土器であった。それ以後，一つの遺跡で複数あるいは多量に出土する例が増加してきた。以下，近年調査された主要な出土遺跡について，共伴する土器や打製石鏃の出土状況を含めて概観していきたい。

①田代町荒田原遺跡（第２図９～12）

大隅半島の南よりの中央部に位置し，標高292mの台地に所在し，雄川に面して立地している。

主体となる土器は岩本式土器と前平式土器であり，磨製石鏃は頁岩製の浅い凹基式のものが３点と未製品の可能性

第１図　磨製石鏃出土遺跡